

---

# メガネの魔法 5 ~恋の嵐にご注意を~

シマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メガネの魔法 5 「恋の嵐に」注意を

### 【NNコード】

N6268P

### 【作者名】

シマ

### 【あらすじ】

彼氏いない歴=年齢の私、遠藤裕美は会社の上司山崎匠さんと、恋人としてお付き合いを始めました。会社に来た取引先の相手は、裕美の同級生で彼女を振った相手……「メガネの魔法」その5 恋人編

「あれ……遠藤？」

「ええ！？ 佐々木君、どうして……」

私、遠藤裕美は仕事中、取引先のお客様にお茶を出したら、その客の中に同級生がいた。その同級生は、高校生の時、私を振った男の人。何時もと違う雰囲気を感じ取ったのか、背後から恋人兼上司の山崎匠さんの鋭い視線を感じたけれど、今は仕事中。冷や汗を隠して、笑顔を作った。

「久しぶり。お前に会えるなら営業への転属も悪くないな」

「相変わらず人をからつて…… それでは、失礼致します」

会議室にいた全員にお茶を出し終えると、さっさと逃げる事にしたが……匠さん……目が怖いです。はあ……後は、会議が終わるまで机から離れなければ大丈夫だよね？

「遠藤ちゃん、お茶は？」

「今、出したから大丈夫ですよ……でも、この時間だと会議がお昼にかかりそうですよね」

「そうね……部屋を空にするとまずかな？」

先輩社員と一人で時計と睨めっこしながら考えた。誰かが残ると

は言つても、お弁当を買わなくても良い人は……私だけだ……

「私、お弁当ですから、『テスクで食べますよ』

「遠藤ちゃんは、それで良いの？」

申し訳なさそうな先輩に、苦笑いで承諾した。『つせ匠さんと一緒に食べれないし、『テスクで一人でも変わらない。もしかしたら、早く終わって一緒に食べれるかも！』そんな期待は最悪な形で返つてきた。

「遠藤、今一人？」

「うわ！……佐々木君、会議は終わったの？」

「うん？ちょっと毎食休憩になつてさ……なあ、今からでも俺と付き合つ気ない？」

「馬鹿な『冗談言つてないで、『ご飯食べないと時間なくなるよ』

昔から本気が、『冗談か分からない事を言う人だけ』、今回はたちが悪い。休憩ならお茶のお代わりがいるかもなあ……匠さんに確認して来ようとした、立ち上がった私の腕を掴んだ佐々木君の目は怖かつた。

「待てよ。付き合つてやるつて言つてんだ。少しは喜んだらどうだよ」

……なんだ？この俺様発言。卒業後に何があつたか知らないが、かなり偉そうな発言に私の堪忍袋は切れる寸前になつた。

「」は、職場でそんな下らない話をする場所じゃないわ。手を放して

「なんだと！？」

「今すぐ手を放せ」

私が言い返すと思つていなかつたのか怒りで顔が赤くなつた彼が、空いていた手を振り上げた。

その動きを止めたのは、鋭い視線を向ける匠さんの声。大股に歩いて隣に来た匠さんは、佐々木君の腕を引き離して自分の胸の中に入れてくれた。

「大丈夫か？」

「はい」

心配そうな匠さんの顔を見て、ホッとしている自分がいた。匠さんが来たからもう大丈夫。

「勘違いしないで下さいよ。誘つてきたのは、その子の方ですよ」

安心した私に追い討ちをかける佐々木君の言葉。私は、なんて最低な男に告白なんてしたんだろう。振られて良かつたと、初めて思つた。

「私に殴られたくないのなら、今すぐ立ち去れ」

「山崎課長？ 部下を信頼してるのでしょうが、その女は変人ですよ」

今……私を変人と……言つた?

ぶちつ

私の堪忍袋が切れた。俯いた私を心配した匠さんが、顔を覗き込んできたけど……今は田の前のクソッタレだ。匠さんから離れると、佐々木君の前に俯いたままで立つた。

「佐々木君……」

私が名前を呼べば、侮蔑の眼差しを向けてきた。顔を上げた私は、二ツコリ笑つた後、佐々木君のお腹に向かつて拳を思い切り突き出した。

「ぐふつ……」

「ザマミロー人を馬鹿にするのもいい加減にしなさい

腰に手をあてて踞る佐々木君を見下ろしていたら、後ろから聞こえた声に冷静さを取り戻した。

「……今、何をした?」

匠さんの田が点になつてゐる。あはは……匠さん、黙つてござめんなさい。

「私、健康作りも兼ねてボクシングジムに通ってるんです」

「……なるほど、いいボディーブローだ」

匠さん、笑いが堪えきれません。肩が震えますよ。……はあ……もう、今さらこの人の前では嘘も遠慮も、無駄な話しだ。隠す必要もないから良いけどね。

「匠さんも、一緒に行きますか?」

「課長に対しても、何だその言い方は！やっぱり変人の馬鹿じや無いか！」

その一言で今度は、匠さんが切れた。まず「!!」田が掘わつてゐる。匠さん、落ち着いて!!えつと……あつ!そつだ!

「匠さん、お昼食べましょー! 今田のお弁当せ、匠さんの好きな物入りますよ! だから……ね?」

「…… そ、うか、な、ら、食、べ、な、い、と、損、だ、な、」

「せひ食べてトモセー」

良かつた～～落ち着いて……ない？その日は怖いです。何で今、抱き締めるんですか？

何で今……キスするんですか！――――――――――

普段より深く激しいキスに翻弄された私は、ぐつたりと匠さんの

胸に凭れかかった。

「私の大事な恋人を馬鹿にするのは止めて頂きたい」

「へ？ 恋人」

鳩が豆鉄砲くらつたらこんな顔をするのかな？ 物凄く間抜け面だ

「今後の発言次第では、御社との取引も考え方ないと伺えませんね」

佐々木君の顔が青ざめ慌てて頭を下げる、逃げる様に……と言  
うか匠さんに恐れをなして逃げた。一人だけになつたオフィスで、  
私はまだ匠さんの腕の中にいる。

「あの……」

「うん？」

「そろそろ放して下さいよ」

「おや？ 恋人に對して冷たくないか？」

匠さんが、ちょっと意地悪な笑顔になり、私は自分の身の危険を  
感じて再び冷や汗が出た。この顔はヤバイです。

「……ここは会社ですよ」

「仕方ないな……帰りは、真っ直ぐ俺の家に行くなら放すけど？」

「家ですか？」

何故、わざわざ家に？話をするだけなら、今日は外食の予定だし  
その時でも良いはず……首を傾げた私に、物凄く怖いぐらい綺麗な  
笑顔で匠さんが爆弾を落してくれた。

「あんな馬鹿が、また現れるといけないし……そもそも、次のステ  
ップに進みたいな」

「何ですか？次のステップって……意味不明なんですが？」

「分からぬ？」

固まつたままの私の顔を覗き込む匠さんが……物凄く怖い

「君を食べても良い？」

「なー？……えええ！？」

そういう意味！？分かったけど……え？今日ですか！？しかも、  
二口二口満面の笑みで、脅さないで下さい！

「返事は？」

「…………う…………でも、経験ないです」

「返事はどうしたのかな？」

もう、人が慌てて焦っているのを明らかに楽しんでるし……大体、

断る分けないってわかつてる癖に…！

「ぐう……責任取つて下せーよ」

「喜んで」

わざと睨みながら言つと、もつ一度、キスをしてやつと解放された。私は、嬉しそうに笑う彼を見て、夜が来るのが怖かつた。

その夜、匠さんの家で嵐の様な一晩を過ごした私は、次の日の朝、怨みを込めて彼を睨んでいた。

「もう少し、手加減して下せー」

「それは、ちょっと……いや、かなり無理だ」

「匠さんのスケベー！」

恋の嵐は、まだまだ続く？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6268p/>

メガネの魔法 5 ~恋の嵐にご注意を~

2010年12月25日15時27分発行